

宝積寺

「宝寺」とも呼ばれる宝積寺には、貴重な仏像や仏具が数多く所蔵されています。最も注目すべきは、地獄の王である閻魔大王と4人の従者の像です。これらの5体を表現した一式の像としては最古の彫像として知られています。寺宝は、何世紀にもわたって参拝者に幸運を授けるために使用されてきた打出と小槌です。4月に行われる「鬼くすべ」と呼ばれる儀式は、桃の木で作られたの弓とよもぎの矢、檜の葉、そして鏡餅を使って悪魔を追い払うものです。この伝統は、最も初期の厄除け行事の様式を反映していると考えられています。

歴史と伝説

聖武天皇（701年～756年）の勅命を受けて、僧である行基（668年～749年）が724年に宝積寺を建立しました。伝説によると、この寺院は聖武天皇が夢の中で竜神から受け取った願いを叶える小槌と打出を祀るために建てられました。別の物語として、784年に天皇の行列が洪水により橋が流されて行き詰まっていた際、老人が現れて水の上を歩き奇跡的に橋を修復し、その後宝積寺に向けて輝く一筋の光の中に消えた、ということがあります。この寺の観音菩薩像の足を確認してみると、足が濡れていたことから「架橋観音」と呼ばれるようになりました。

歴史上、宝積寺は天王山周辺の戦いに巻き込まれることもありました。1582年の山崎の合戦では、屈強な武将、豊臣秀吉（1537年～1598年）が、軍隊の拠点をこの寺院に置きました。1864年、京都御所の禁門で徳川幕府への反乱未遂に終わりました。この事件後、残された反幕府軍の兵たちは、宝積寺に陣を置き、天王山で最後の抵抗を行いました。

閻魔堂

この寺院で最も有名な彫像は、冥界の総司である閻魔大王とその4人の従者です。死者の霊を裁く閻魔大王は大きな冠をかぶり、儀礼用の笏を持った姿です。彼の周りには悪行を書き留め、犯罪を読み上げ、判決を発表し、評決を記録する役目を司る「司録」「司命」「俱生神」そして「閻黒童子」がいます。これらの彫像は鎌倉時代（1185年～1333年）に作られたもので、国の重要文化財に指定されています。参拝者は閻魔大王に罪の許しを乞い、堂内に設置された特別な投函箱を使って閻魔様に懺悔の手紙を“送る”ことができます。

寺院の境内と本堂

本堂には、寺院の本尊である国指定重要文化財の鎌倉時代の十一面観音立像が祀られています。小槌宮には、七福神の一柱である大黒天の無数の木像や、七福神の姿を彫った宝船、そして開運や心願成就のための神事に用いられる小槌や打出などが納められています。以前の祈祷では、参拝者の手を仏具で軽く3回叩き、参拝者はこぶしを握りそのご利益を家に持ち帰っていましたが、

現在ではご利益は小さな明るい色の袋に入れられています。また、別の巾着は願い事を書いて会場の外に吊るすための絵馬としても使用することができます。

寺院の境内には豊臣秀吉の存在を偲ばせるものがいくつか残っています。「一夜塔」と呼ばれる三重塔は、彼の軍によって一夜にして建てられたと言われています。本堂の近くにある「成功の石（出世石）」は、秀吉が座り日本統一という目標を熟考したとされる場所です。石に座った参拝者は、秀吉同様に出世のご利益があると言われています（お座りになる前に、僧侶またはお寺のスタッフに許可をもらってください）。